

20世紀前半のタイ国華字新聞に見る華人教育

王 竹敏

Abstract: Until 1900, there are 608 thousands of Chinese people living in Thailand. During the late Qing Dynasty and early Republican Periods, there were many kinds of Chinese newspapers had published in Thailand. These newspapers were born by Chinese intellectual. They accepted Liberal Democratic thought from overseas, and undisguised advocacy of revolution. In addition, with the development of Chinese society in Thailand, there were almost 28 kinds of Chinese newspaper have been published in Thailand during the Nineteen twenties to Nineteen thirties.

The Chinese newspaper which was published in Thailand printed the information about Chinese society in business, economics, school. And also they pay attention to the information about their hometown in China. The news had promoted the development of Chinese Economy, and became a very important source of information.

According to the school advertisement and review which were published in Chinese newspaper in the first part of the 20th century, the Chinese education in Thailand of that time is analysed.

Key words: the first part of the 20th century, Thailand, Chinese newspaper, Chinese education, Chinese school

一、はじめに

1900年頃のタイ国の総人口730万人に対し、タイ国に居住している華人は約60.8万人に達していた。その後、華人人口の増加につれ、1917年には約90.6万人の華人がタイに定住していた。華人の比率はタイ国総人口923.2万人に対し9.8%であった。¹ 華人人口の増加にともない華人社会もますます発展していた。

清末から民国初年の間に、タイ国の華人社会には多くの種類の新聞が出版された。新聞の特長は言論の伝播であり、当時の新聞は基本的にタイ国に住んでいる華人によって創刊された。彼らは海外から自由民主の意識を受け入れ、中国の革命を宣伝した。さらに、最初の新聞は主に中国の政治情勢を中心に報道していた。タイ国内の最初の中国語新聞は1895年に出版された

¹ GW. Skinner: Chinese Society in Thailand: An Analytical History, Cornell University Press, 1957年, 60～61頁。

『漢境日報』であった。²その後、康有為などの「保皇派」も南洋で新聞を創立し、「革命派」の新聞と対立していた。³そして、タイの華字新聞業の初期は中国に関する政治思想闘争の舞台となったと言える。

1920年代～30年代の間にタイ国で華字新聞はおよそ28種類が出版された。新聞は華人経済の発展を促進したのみならず、中国とタイ華人の距離を縮め、華人社会において重要な知識の情報源となっていた。当時の新聞は華人社会の商業・経済・学校・会館などの情報を掲載し、中国全国及び福建省・広東省東部の情報を重視していた。

一方、華人社会の発展と華人が経営していた工商業などの領域の成功によって、多くの華人は子供たちの教育に注目し始めた。最初の華人教育は中国の伝統的な塾の教育方法により、中国の伝統的な幼児教育に使用される『三字経』・『百家姓』・『千字文』等を教材としていた。⁴その後、科学・社会・国際交流の進展によって、華人教育のためには中国語・潮州や汕頭の潮汕方言・数学・英語・タイ語・音楽・歴史・地理などの課程が開かれた。

近年、タイにおける華人教育について注目され、タイ国学者洪林の『泰国華文学校史』や張斌の『戦後泰国華文教育之演变』やVictor Purcellの“*The Chinese in Southeast Asia*”などの成果があり、20世紀前半におけるタイ国で出版された華字新聞に注目しているが教育に関して詳細に検討されていない。

そこで、本論文は、1920年代から1930年代のタイ国において、創立された数多くの華人学校ならびに華人教育について、当時タイ国で出版されていた華字新聞の学校広告・教育評論などの記録を中心に明らかにするものである。

二、20世紀前半におけるタイ国の華人教育の現状

タイ国において最初に中国語で教育された学校は宣教師の華人姜氏が創立したものである。⁵この学校は1852年9月30日に開学し、1860年に姜氏の死去により閉校になった。⁶その後、辛亥革命において、タイ国の華人学校は多く出現した。華人の先進者は海外へ革命を宣伝し、近代的な学校を創立した。タイ政府の承認でプーケット島に最初の華人学校が成立したのは1913年5月30日のことであった。1916年にタイ国政府は華人学校を管理するため、厳格な法例を発した。この当時、タイ国で創立された華人学校は多くを数えるが、しかし、経費・教師・学生・環境などの原因でほとんどの華人学校は数年のうちに閉校になった。このように、タイ国の華人教育の歴史には様々な曲折があったと言える。

² 洪林「泰国華人報簡史」、『泰国華僑華人研究』、香港社会科学出版社、643～677頁。

³ 洪林「泰国華人報簡史」、『泰国華僑華人研究』、香港社会科学出版社、643～677頁。

⁴ 洪林「泰国華文学校史補充材料」、『泰国華僑華人研究』、香港社会科学出版社、589～623頁。

⁵ 洪林「泰国華文学校史」、『泰国華僑華人研究』、香港社会科学出版社、457～588頁。

⁶ 洪林「泰国華文学校史」、『泰国華僑華人研究』、香港社会科学出版社、457～588頁。

謝猶榮氏⁷の成果により、1912年から1939年までの時期におけるタイ国の華人学校の総数の推移を次の表1にまとめた。

1912～1939年タイ国華人学校盛衰表(表1)

西暦年	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	総数
	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	
学校数	4	5	1	2	3	2	6	1	4	2	1	1	4	3	153校
西暦年	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	
	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	
学校数	8	15	15	16	12	10	5	11	6	3	0	3	8	2	

1912年から1939年までの27年間に、タイ国で創立された華人学校は153校に達している。1912-1925年の間は、毎年約2.8校が開校され、1926-1939年の間は、毎年約8.2校であった。その理由として1912-1925年までの華人学校はほぼ萌芽期であり、幼児の就学する風潮がまだ興っていなかったと思われる。その後、国際的に教育重視の思想が宣伝されるにつれ、子供を就学させる親が多くなり、新開校される学校が増えたと考えられる。謝猶榮氏は、「1912年至1939年泰国華校名表」⁸の備注で「尚有甚多開辦年期未詳之學校」⁹と指摘しているように、表1の他に開設された学校も多くあったと思われる。これが当時の華人学校開設の一面であるとともに、華人学校開設の一面を示しているであろう。

華人学校の状況について、1924年3月9日付の『暹京日報』に「教育與國家之關係」と題した評論が掲載されているのが参考になろう。

酌設中學與師範學校南洋華僑興辦學校。二三十年於茲矣。成績應如何高美矣。今環觀南洋之教育狀況，則何如廣大之南洋。中學學師範。尚不滿十間。何相差若是之甚也。其他且弗論。即以暹京一隅言之。倘若之暹京。華僑不下百千萬。中學與師範。今竟無之。不亦奇異特絕之事乎。夫中學少。則不能容納小學畢業生。爾此多數畢業生在南洋既無因有升學之地。因於經濟。或他種問題。不能旋國升學。年紀輕輕學識短。想就地謀工作又非常之困倦。於是坐任韶光虛度。拋荒學業。豈不惜哉。至於創辦師範學校。尤為重要。因師範學校，為製造未來小學教師之場所也。南洋各華校之小學教師。于兒童心裡。有所研究者。誠不多見。因不懂教育原理。爾鬧出笑話者。報章時有記載。故今日南洋華僑教育欲從根本解決。必多

⁷ 謝猶榮「一九一二年至一九三九年泰国華校名表」、洪林『泰国華僑華人研究』、香港社会科学出版社、607～612頁。

⁸ 謝猶榮「1912年至1939年泰国華校名表」、洪林『泰国華僑華人研究』、香港社会科学出版社、607～612頁。

⁹ 謝猶榮「1912年至1939年泰国華校名表」、洪林『泰国華僑華人研究』、香港社会科学出版社、612頁。

設師範學校。以養成無數小學之良好教師也。然欲籌辦中，學興師範。又宜首先注意下列之三事。

- (甲) 聘教員
- (乙) 招學生
- (丙) 籌經費

但予所最注意，而承認將來能收良好之效果者，在精選教員之一端，諺曰，有人材，自然有錢財，蓋有材之人，自然有法籌經費。況南洋之華僑，又多熱心公益之士乎。是知經費之有無。全在得人才與否耳。若招生一層。則須精細調查本地之高等小學有若干所。每年畢業生大約有若干名。何者可入師範肄業。何者可入中學肄業。全盤打算。然後著手創設中學與師範。以免過猶不及。邱夷而淵實之弊也。是在關心教育之留意耳。

この記事は、華人学校の現状について述べており、華人学校は教校が開設されたが、いずれも小学校や初級学校であり、生徒は卒業後の進学先の中学校あるいは師範学校が全く無いと評論されている。さらに、華人学校は初級教育を開設するだけでなく、師範学校も開設する必要があると指摘し、それには華人師範学校の開設方法として、教員や学生の募集・募金が必要であると提案している。

この評論からも明らかなように、1924年当時のタイにおける華人教育は主に小学校が中心で、高級な師範学校などの教育はほとんど行われていなかったことがわかる。

1928年8月4日付の『国民日報』に「華僑教育協會向全國教育會議之提案」が掲載されている。

華僑教育協會向全國教育會議之提案

- (甲) 提議人 華僑教育協會
- (乙) 組別 教育行政及經費組
- (丙) 議題 發展華僑教育案
- (丁) 理由
 - (一) 發展華僑教育，以求國際上之自由平等

(説明) 我中華僑胞散居荷屬爪哇島，蘇門答拉島，邦加島，小巽他華島婆羅洲，西里伯島，英屬海峽殖民地（新加坡）、馬六甲（檳榔嶼）、馬來半島、北婆羅洲、緬甸、印度、澳大利亞、新西蘭、美屬菲律賓群島、檀香山火努魯魯、法屬安南、日屬朝鮮、以及暹羅、日本、南北美洲、歐洲、西伯利亞各都會，不下千萬人，此多數僑胞居留海外，無論在政治上，經濟上，或社會上均不能享受平等自由之幸福，推源其故，一以國家無保護僑民之政策，一以華僑教育之不振興，不普及，一般僑胞，尚無政治上或經濟上之充分智識與能力，以爭此自由平等之待遇，良以教育力用，施諸僑民，在國際方面，應發揚本國民族精神及圖謀本國民族生存之途徑，近世各國，為圖謀本國民族之獨立與生存，莫不對於居留外國區域內之本國國民，施行民族自衛教育政策，宣揚國威，傳達文化，以鞏固其在國際上之信用與地位，

然而我中國則大不然，國內政府，向無管理華僑教育之專設機構（國民政府大專院設立華僑教育委員會係最近之事），爾各居留地政府對於華僑教育之取締，又無所不用其極，千餘萬僑胞，處此情況之下，欲說離外人之羈絆而不淪於奴隸之城，揆諸情事，實有未能，是以欲謀僑胞之獨立生存與國際上之自由平等，不可不發展華僑教育。

（二）發展華僑教育，以求僑民在教育上，有均等之機會

（説明）根據中國國民黨，總理之主張，今後中國政治制度，應採全民政治，然欲實施全民政治，非先從全民教育入手不可，故就政治方面而論，凡屬中國國民必須一律平等享受教育，斷不容有所偏畸，遺教育普及上之缺憾，惟向來我國政府，漠視華僑，形同化外，因此對於華僑教育，毫無具體計劃與設施，對於華僑自身所辦之學校，亦皆漠然視之，與替一任其自然，如此輕視華僑，揆諸情理，殊失平衡，劇荷屬教育部 1925 年教育公報公所載【依旅居荷屬地華僑人口計算，失學兒童總有十萬左右】，此僅就荷屬一隅而論，若推及於南洋全部及其他各處，恐失學之華僑兒童，為數當什百於是，倘國民教育政府對此多數之失學兒童，不謀救濟，不但在民族方面，使我僑胞地位，發生種種之危險，即由民權而言，亦與總理主張之【勸行普及教育】政策背馳，所以為謀僑胞在教育上有均等之機會，不可不發展華僑教育。（【】は記事の引用部分である）

（三）發展華僑教育，以謀全世界人類之和平

（説明）中國國民黨之三民主義，內涵非常廣大，不僅在消極方面，要求解決中國目前之危急問題，廢除不平等條約，以脫離外國之羈絆而已，積極方面，必須使全世界人類，主張人道正義，以促將來的永久和平，教育華僑雖如第一項理由中所云，為發揚本國民族精神及圖謀本國民族生存計，應有一種民族自衛教育之設施，然此不能概括華僑教育全部之宗旨，華僑教育宗旨除民族自衛外，尤當將我中國文化之價值，宣揚傳播於全世界，一方補救西洋文化之缺憾，他方又熔合西洋文化面使之成為世界性，以促進全世界人類之和平與幸福，總之，我華僑教育之宗旨，對內要謀國家之獨立及民族之生存，對外則造成世界之和平與人類之幸福，如此，則華僑教育之意義，機崇高而偉大，絕非似列強借教育之名而行文化侵略之實，所可同日而語也，故為全世界人類謀永久之和平與幸福，更不可不發展華僑教育
依據以上三項理由，敝會以為發展華僑教育，實刻不容緩，不揣冒昧，敬具發展華僑教育辦法十二項，提交大會公決，以備大專院華僑教育委員會採擇執行，茲列敘於次

ここでは華人教育の発展と華人社会の環境の関係を提案している。華人教育は主に三つの問題点があった。第一は、中国に関するものであり、中国政府は海外華人を保護せず、海外華人の教育にも関心が無かった。第二は、タイ政府は華人教育を抑圧する政策を実施していた。第三は、タイに定住する華人は、多くが低収入者で、教育を受けた経験がない、子弟の教育も重視していないと指摘されている。

以上のように、当時のタイ国で華人教育を発展させるには多くの困難があったのである。

その後、1936年7月8日の『民主新聞』に「華僑需要什麼教育」が掲載された。

暹羅華僑教育停頓六七年了。數百家學校被查封，十餘萬兒童失了學，這比較任何損失，都要來得嚴重。強迫教育的條例依然存在，致使華校的恢復，仍受慘重的打擊，因而要堅決反對施於華校的強迫教育條例。

為暹羅打算也好，為華僑打算也好，假如中暹要親善，要共存共榮，華僑文化的發達，不但打有助於華僑社會，促進僑社安定，促進僑社繁盛，也就是等於安定了暹羅，繁榮了暹羅，只有最短視的執政者，才硬要強人之所不能為，強迫華教，無異取消華教，對華僑不利，對暹羅何曾有利。

為了華僑，也是為了暹羅，所以我們願迫切提出呼籲，要求當局及早改善強迫條例，更願我僑胞為爭子女的教育自由，必須同聲響應，硬要抗議，硬要力爭。

第一，要民主的要自由的，校政要公開，聘請教員，絕不徇私，選賢與能，通力合作。研究要自由，言論要自由，統制的，包辦的，獨裁的，當化的都不得，一切當團都應該離開學校！讓孩子呼吸自由的空氣，讓孩子們沐浴民主的陽光。

第二，要科學的要實用的。當前的華僑社會需要什麼人才呢？如果不注意到這一點，只是拼命的我要辦中學，你要辦中學，他也要辦中學，這固然是好現象，但是於僑社當前所急缺需要的人才，也應該就地培養。比如商場方面，需要大批商業簿記人才，這就需辦商科學校。各地小學教師非常缺乏，這就需要有健全的師範學校。其他如水產，如工業，如新聞學位，現在及將來的需要，即使一時不能創立，也可以再現有的中學中，僅可能附設起來。

第三，要大眾的要普及的。華僑文化太落後了，一面是由於教育不普及，大多數人沒有享受教育的機會，一面又有下流文化的傳播，如神怪淫蕩的戲劇，仍然鑼鼓震天，色情刊物與瘋人刊物，尤其充斥市場。如此情形，怎能使僑社獲得進步？要普及華僑教育，消極方面，就應該消滅神怪淫蕩的戲劇，就應該反對色情文學與造謠爛漫罵的謠言；積人民的世紀，需要人民的新文化，需要人民的新教育，願旅暹的三百萬僑胞，團結一致，共同努力，爭取教育自由，創造新的教育。

この論評は華人に必要な教育を中心に提案している。そこで、華人学校の発展について、四つの意見を提案した。第一は、当地の華人が団結し、タイ政府が実行した「暹羅強迫教育実施条例」に抗議すること。¹⁰この条例は1921年10月1日から施行され、主に幼児生徒に対し、タイ語の学習時間を毎週25時間以上とするものであった。それに対して、中国語は、毎週六時間以内と厳格に規定された。生徒がタイ語の試験に合格しないと、学習時間が延長された。第二は、学校の校政・財務情報を公開し、民主的な学校を創設すること。第三は、学校の教育は社会の要求によって開設する。当時は貿易専門や師範専門の生徒が増加し、これらに関する課程が必要であった。第四は、公立学校はすべて義務とし教育費を免除し、多くの子供に教育の機会を与える必要があるなどであった。

¹⁰ 洪林「泰国華文學校史」、『泰国華僑華人研究』、香港社会科学出版社、457～588頁。

この評論からも明らかなように、1936 年当時、華人学校の社会環境は十年前とほとんど変わりがなかった。タイ政府の華人教育に関する法例が存在するため、華人教育が発展しなかった。また学校の財務・政務を公開しないため、募金もできなかった。早急に専門的な教育課程を開設しないと、社会に大きく貢献することができなかった。学費免除の学校がないと、多くの人材は育たない。このように華人学校の発展は華人自身の努力だけでは足りず、社会環境の変化が必要とされていたのである。

以上が、20 世紀前半のタイ国における華人学校の現状であった。

三、20 世紀前半のバンコクの華人学校の概況

(1) 学校の年次計画

タイにおける華人学校は、タイ国の祝日や、中華民国の祝日も休日とした。『中華日報』の 1927 年 7 月 3 日付に「暹京華僑專科學科課程（第三学期）」が掲載されている。

年次計画	日期
開學	九月八日星期四（上午八點半鐘）
孔誕紀念	九月二十二日星期四（丁卯年八月二十七）
國慶紀念	十月十日星期一
暹君主朱拉隆功忌辰紀念	十月二十三日星期日
暹君主千秋壽辰紀念	十一月八日星期二
孫中山先生誕辰紀念	十一月十二日星期六
年考	十二月二十一日起至二十三日（三日間）
年假休業	十二月二十四日起至民國十七年一月七日（十五日間）

暹京華僑專科學校の第三学期は 1927 年 9 月 8 日から始まり、約三ヶ月半後の 12 月 21-23 日の期末試験で終わる。学校はタイ国の祝日だけでなく、孫中山の誕生日も祝日とした。さらに 1927 年 9 月 9 日から 1927 年 12 月 23 日までの約 106 日間に、土日と祝日の 35 日間を除いて、開学期間は 71 日間であった。次のような授業時間も掲載されている。

上課時間

本校上課時間。每日上午八點半鐘起。至十一點半鐘放學。下午一點鐘起。至四點放學。

教授方法

課本以文言文為主。而以白話文為輔。讀音解釋以潮州音為主。而以國語及各屬方言為輔。每班人數以三十人為限。逾額則分為兩組。或三組教授。冀收良好效果。

試驗分數計算方法

本校每學期除平日臨時試驗外，於每學期終，另行試驗。藉以考察學生所學之成績。其分數計算方法，即將平常總平均分數與期考分數合計。而平均之。即為學期總平均分數。其成績在

八十分以上者。為最優等。七十分以上者。為優等。六十分以上者為中等。六十分以下者為差等。

毎日の授業時間は6時間であり、授業は中国の伝統的な古文と中国語を主に、広東東部の方言である潮州語も教えていた。生徒は中国語の程度により二組か三組に分けられた。期末の成績は平常成績と期末成績を合算して認定された。

(2) 普通学校の情況

それではタイにおける通常の華人学校はどのような情況であったであろうか。

1920年5月24日にタイ在住の華人が創立した有名な学校に培英学校がある。¹¹培英学校の発展には多くの困難があったが現在も存在している。培英学校は、最初男子校を1920年に創立し、1926年に女子校を併設した。1926年9月18日付の『国民日報』に「培英學校 潮州女校 校董部啓事」の記事が見られる。

啓者本男女兩校校董，循例每二年選舉一次。茲值本屆校董任期將滿特於五月一日，發出選舉票選舉民國六十七年校董及董事部職員、嗣因被選者多數辭職，以致下屆校董部未能依法成立。故在七月廿四號開全體董事會議，席間王步先君提出向青年團疏通担任辦法結果，表決限期一月由王君步先向該青年校董團疏通出，而維持如今限期已過據言疏通無效同人等，既愧維持之無方復慚疏通之無效不得已依照民國十三年前校董部辦法登報公請担任凡我潮僑熱心教育諸君子尚望於一月內到校董部承接維持庶幾教育幸甚同人幸甚

中國民國十九年九月十六日

旅暹潮州公立培英學校

培英学校の男子校と女子校は同じ理事会に属し、学校は民主、公平の原則に従い、学校内の情報を社会に公開していた。その培英学校の生徒募集広告が掲載された『中華民報』の広告から当時の同校の情況を見てみたい。

『中華民報』1927年1月4日付の広告

啓者本男女兩校定於一月十日開學，凡華僑青年有志求學者，請從速到校報名，為盼。另者培校初中一二年因人數太少，現為認真辦理起見，每級學生須有二十人以上，始行開班，否則暫行停辦，特此佈聞。

培英女校（潮州女校）同啓

『中華民報』1928年1月4日の広告

培英學校（潮州女校）招生廣告

啓者本兩校定於陽曆本月其實（星期六）開學，凡我華僑青年有志求學者，請從速到校報名，為盼。茲因培校為提高華僑學子程度起見，擬特開辦初級中學第一年級一班，如報名人數已達至十五人者，即行開班（按去年本校高小畢業生已有二十人）特此通告

¹¹ 洪林「泰國華文學校史」、『泰國華僑華人研究』、香港社会科学出版社、457～588頁。

培英學校（潮州女校）同啓

この二つの広告の時間差はちょうど一年である。培英学校は1927年と1928年ともに初級中学校を開設したが、1927年の募集人数は20名、1928年の募集人数は15名であった。1927年の培英学校に応募した生徒数が20名に満たなかったため、1928年度の募集人数を減員したと考えられる。

1927年1月31日の『中華民報』に「暹羅華僑中正男女初級學校招生」が見られる。

（校名）本校定名為暹羅華僑中正學校

（校址）暹京黃橋新路門牌一千六百八十七號

（宗旨）在造就平民以完成國民教育有以中正愛群愛國之精神，而達平等之目的為宗旨

（肄業）本校為普及教育期間特增設廣音潮音，凡有志就學者，皆得報名，入學逐月臨時送來插班亦可

（學費）初級生一年酌收一株，二年酌收一株五十丁，三年及四年酌收二株，高級一年及二年酌收二株五十丁。

（科學）初級生有國文修身、暹文、英文、算數、體操、音樂、圖畫、社會三民等科
高級國文、修身、暹文、英文、算數、歷史、地理、三民社會、手工、音樂、體操、國語、圖畫等科。

（學年）分初級高級，初級四年畢業，高級二年畢業，每級學生 人為限

（入學）凡幼童男女年滿六歲以上者，爾有殷實人介紹均可來校肄業，惟須守本校規則。

開學時期擬於新曆二月十號，即舊曆正月初九

贊成人 仰光永安堂 胡燦珍 胡文珍 朱廣科 劉生 梁敬熙 溫春睭

1927年初に華人学校の中正学校が創立された。学校は6歳以上の男女生徒に対し、主に潮州、汕頭地方の方言で授業された。学校は初級と高級とに分かれ、級別によって学費が異なり、開設された課程も同じではなかった。後援者の中に、個人名のみならず、商店名も見えるように、中正学校が華人商店の支援を受けていたことは明らかである。

協益平民学校については、1927年3月17日付の『国民日報』に「協益平民學校招生簡章」が掲載され学生募集された。

本校已向居留政府教育部註冊決定於四月一號開學

校址 門牌一二五九號校舍宏大空氣清爽適合兒童進學之地

宗旨 實行平民化與革命化之教育

學制 採用新學制先辦初級小學部

學額 暫定六十名男女兼收

納費 每月收堂費一銖

遠道學生如用車護送則酌收護送費寄食午膳每月收膳費二銖

報名處-----越迪懇本校

三聘街 南華商店 國民日報 馬燦紅
 龍尾 尾豐餉當 豆芽廊 天寶金店 胡逸岩
 萬茂街 宏大洋行 松運 達叻仔 同春源

十六年三月十四日

正校務主任 吳鈍生

副校務主任 元二超

協益学校は、1927年4月1日に開学し定員は60名であった。最初に小学校だけが開設され、生徒の学費は毎月1株（パーツ）で、昼に学校で食事する場合は毎月3株であった。この学校は中正学校と創立時期がほぼ同じであり、多くの華人商店の支援を受けていたことは広告に列記された「報名處」の華商名から明らかである。

華僑公学の教育内容については、1927年8月29日付の『中華民國報』に掲載された「華僑公學招生簡章」によって知られる。

(一) 名稱 本校定名為華僑公學

(二) 地址 越帖素舜（前專科學校舊址）

(三) 宗旨

（高初）本校以留意兒童身心之發育培養國民道德之基礎，并授以生活所必需之知識技能為宗旨

（特別組）本校注重國化之精神，以分別養成升學材力職業之智能，并全人的生活為宗旨

(四) 學制

(一) 初級小學四年

(二) 高級小學二年

(三) 選修科（各級功課均得選修）

(四) 特別組（專授國文英文算學美術四科）

(五) 學期編制 本校系採用春季始業，又因居留地氣候與祖國不同，故每年分為三學期

(六) 學費

初級小學 每月三株 高級小學 每月四株 選修課 每月四株

特別組 每科每月三株二科五株三科七株（每人不能修過三科以上）

(七) 堂費 每年一株入學繳清

(八) 膳費 午膳食粥每月二株 食飯四株 全日膳費每月十株

(九) 運動費 每年一株入學繳清

(十) 寄宿費 每月三株（床位水龍電火在內）

臨時總理 陳炳昌 臨時財政 姚豐泉 臨時校董 周智利 林秀芬 姚奕川 陳源泰
 勸捐員 王友士 姚亞民 周智利 姚晦之

報名處 越三振新合順 鐵橋頭陳炳昌 三聘謙和祥源記 四方廠南天咖啡店

校務主任 吳吟梅啓

華僑公学は、通常の華人学校とは異なり、小学校初級・高級だけではなく、特別組・選修科も開設された。特別組と選修科は社会と生徒の要求によって、専門的な知識を教えた。学費は通常の学校よりも高く、運動費等も徴収していた。

またこの華僑公学が女子生徒を募集した広告は、1927年9月30日付の『中華民報』に掲載された。

本校為擴充女子部，主任有志向學著可速來本校報名（女士係湘省高級女子師範畢業，富有教育經驗，而於歌舞英算四科尤為特長）

華僑公學啓

華僑公学は女子部を開設し、教員は湖南省女子師範学校を卒業し、歌・舞・英語・数学が上手な女性であった。

暹京新民学校初中部の募集情報「暹京新民学校初中部招生簡章」は、1930年12月18日付の『晨鐘日報』に掲載されている。

- 一 學額 一年級一班四十名 男女皆收
- 二 資格 高小畢業或有同等程度的
- 三 報名手續 自本日起到廿年一月五日止 每日上午九時至十二時
记帶四寸半生相片一張 學業證書并報名費五十丁
向本校報名登記
- 四 考期 二十年一月六日上午九時至下午三時
- 五 考試科目 國語 算數 英文 嘗試
- 六 課程 國語文 公民 歷史 地理 自然 生理衛生 數學 英文 暹文 音樂
工藝 形藝 體育
- 七 收費 學費每月五銖 講義費及雜費每月三銖 體育費每學期兩銖
學生自治會費每學期八十丁 通學生膳費每月二銖午飯每月四銖
寄宿生膳費每月十銖 宿費每月三銖 保證金十銖（退學發還）
- 八 減費和免費 凡貧寒子弟有志向學 經本校審查確實的得準免費或減費
- 九 開學 廿年一月九
- 十 通告 本校小學部高初各級明年都要增開班次 計高級二年上下各一班
一年下一班 一年上二班 初級四年下二班 四年上三班
三年下二班 三年上二班 二年上 一年上下各一班
每班人數最多限四十八 額滿不收 有志就學的 先期到本校報名 高
級考期廿年一月八日上午九時 初級定 一月九日上午九時

暹京新明学校は、中学校であり、初級と高級に分かれていた。学費は前に紹介した小学校よ

り高額であった。同校は国語・公民・歴史など数十の課程を開設し、生徒は寄宿生を選択することもできた。学費は毎月5株で雑費・講義費なども徴収された。さらに学校は就学困難な生徒に学費免除を行っていた。このため多くの生徒が教育を受ける機会を得た。

専門女子校の状況については1928年1月4日付の『中華民報』に掲載された「旅暹立懿德女校招生廣告」によってわかる。

本校因鑒於女學為當今急務，普及教育起見，即將原日懿范女校改組公辦。修擴校舍，辟多教室添置儀器，加聘教員，迄今籌備完善，特以擴充學額添招高小一二年級新生，初級一三四年級插班生，凡有志求學者連到報名可也。

投考資格 (一) 高小須有國民畢業程度

(二) 國民班不拘

學費 高小每月三株 初級每月二株 上課時先繳清

校址 萬茂警察街

旅暹公立懿德女校啓

懿德女校は1918年にバンコクで創立された。当時の懿德女校は女子教育を普及されるため、教員の募集と教室の拡充などに配慮した。学校は初小学部と高小学部に分かれていた。学費は級別により、初級は毎月2パーツで、高級は毎月3パーツであった。

以上からも明らかのように、1926-1930年の時期において、タイ国では幼児を就学させる風潮が興り学校の状況が一変したことがわかる。男女を分けた学校も、分けない学校もあった。学校は基本的に中国語だけを教えるのではなく、広東東部と福建地方の方言も教えていた。学校は生徒の級別により学費を徴収し、初級は高級より学費が安く、高級は選修・特別組より安かったことがわかる。また、大部分の学校の規模は小さくなく、ほとんどの学校の生徒数が100人以内であった。

(2) 専門学校の状況

タイで開設された学校は広東語だけを教える短期の華人学校も存在していた。1927年12月8日の『聯僑報』に掲載された「開辦粵語講習所」によれば、

(豐順) 第三區市金湯學校教員林某等，近擬在該校開辦短期粵語講習所，特請張某為教員，現報名者甚眾，日間可以開課，聞該所暫借金湯第五教室雲。

とあり、広東語を教える短期学校は幼児を募集するだけではなく、主に成人の生徒を募集していたことがわかる。

(3) 生徒の学費免除

タイの華人は、多くの貧しい子弟に就学の機会を与えるため、華人学校も学費を全額減免する生徒を募集している。免除生は師範学校だけでなく、通常の華人学校も受け入れていた。タイに在住していた華人は大部分が低収入のため、学費減免の措置により子供を就学させる機会が増えた。当時の華人子弟の免除生徒を募集する状況は以下のものであった。

○『中華民報』1927 年 12 月 26 日の広告

新民學校招生廣告 本校現定一月六日開學專修班，及高初級小學，各級均有餘額，有志就學著須於開學前至竹攀喃本校報名，再本校為使貧寒子弟有向學之機會起見，特設免費生，學額十名，願就此項學額者須先期報名，聽候審查。簡章及免費生章程函索即寄。 暹京新民學校啓

○『中華民報』1927 年 6 月 17 日の広告

本校現承上海國立暨南學校函托，代為招考高級中學師範科免費學生，茲定於六月二十四日上午，九句鐘在本校考試，有志投考者希先來本校閱看章程并行報名，屆時再來聽候考試為荷。 暹京育民學校啓

○『晨钟日报』1930 年 12 月 10 日の広告

黃魂學校開辦專修班級收免費減費生啓事

本校決於新年開辦專修班、主要科目為國文英文數學等、籍容納一般無力回國升學或做升學之準備的青年、同時因擬擴充班數、高初各級皆舉行續招新生、又本校為救濟窮苦青年、決自新年起實施平民教育定全校學生額數十分之一為免費生、十分之一為減費生、希親愛僑胞注意至要求免費或減費手續須家長或相當介紹人來校證明、經本校招生委員會審查通過為合格。又本校新年開學日期定於一月五日、本校自備有校車運送學生素稱利便、每月只收車費兩銖、學費初級每人每月三銖、高級四銖、專修班則定為五銖此啓

学費免除生を行った学校は、学校事情により募集条件も異なっていた。新民学校は通常の学校であったが、免除生の定員は 10 名以内であった。暹京育民学校は上海国立暨南学校の生徒募集を代行し、師範科の免除生を募集したが、希望者は試験を受けなければならなかった。現在も存在する華人の名門校黄魂学校は、当時の全学生数の 10%を免除生とし、さらに、10%を減額生としている。特別の試験が無く、父母や紹介者の証明が必要とされていただけである。

このように 20 世紀前半のタイにおける華人学校は困難な華人子弟の就学のため、学費免除生も設置していた。このように、各学校により方法が異なっていたが、社会環境により、有識華人が子弟に教育させるための環境が 1920 年代よりも大いに改善された。

四、おわりに

1920-1930 年代の間にタイ国において出版された華字新聞の学校広告・教育評論を中心に、タイ国で創立された数多くの華人学校ならびに華人教育について実情を明らかにした。

19 世紀末から 1920 年の間に、タイ国における華人人口の増加によって、華人社会には多くの種類の新聞が出版された。当時の華字新聞は華人社会の商業・経済・学校・会館などの情報を掲載し、華人子弟の教育なども注目していた。

しかし、当時のタイ国での華人教育は中国政府、タイ国政府、華人自身など三方面から注視されず、発展への道は困難であった。そのため 1936 年頃まで、華人学校の社会環境は 10 年前

とほとんど変わりなかった。その最大の障害は、タイ政府の華人に対する制約的な教育条例が存在し、また華人学校が財務・政務を公開せず募金が困難であった。特に早急に新たな教育課程を開設しないと、華人が社会で大きく貢献することができなかった。学費免除の学校をし創設しないと多くの人材が育成できなかった。このように、華人学校の発展は華人自身の努力だけでは足りず、社会環境の変化が必要とされていた。

1924年以前のタイ国では、華人学校は数校が開設されたが、華人教育は主に小学校が中心で、高等師範学校などの教育はほとんど行われていなかった。当時は男女同学の学校と、男女を分ける華人学校もあった。言語教育として基本的に中国語だけでなく、広東東部と福建地方の方言も教えていた。大部分の学校の規模は小さく、ほとんどの学校の生徒数が100以内と見られる。1925年以降、有識華人の努力によって、華人学校は緩やかに発展した。1926-1930年の間、タイ国では、幼児を就学させる風潮が興り学校の状況が一変した。華人学校は生徒の級別により学費を徴収し、初級は高級より学費が安く、高級は選修・特別組より安かった。さらに、当時の華人学校は困難な華人子弟の就学のため、学費免除の生徒を募集した。このように、各学校により方法が異なっていたが、先進的な華人が子弟に教育させるための条件が1920年代よりも大いに改善された。

以上のように、1920-1930年の時期におけるタイ国において出版された華字新聞は、華人社会の商業・経済・学校・会館などの情報を掲載するのみならず、中国全国及び福建省・広東省東部の情報を重視し、華人の幼児教育なども注目していた。さらに多くの華字新聞は、華人経済の発展を促進したのみならず、中国とタイ華人の距離を縮め、華人社会において重要な知識の情報源になったことが、上述の華字新聞の記事や広告などから明らかである。